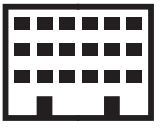
団地の暮らし



平成二十六年 冬

団地の暮らし

加藤文俊

団地へ

『団地への招待』（一九六〇）という「啓蒙映画」を見ると、あの頃の人びとの高揚感が伝わってくる。土地を拓き、あたらしい都市（まち）をつくったのだ。学校も公園も商店も、さまざまな施設が集積し、これまでにはなかった共同生活への期待が、いきいきと描かれている。洋光台団地で入居がはじまったのは、一九七一年だ。四五年近く経ったいま、ぼくたちには、何が見えるのだろうか。どのような「団地の暮らし」に触れることができるのだろうか。

夏休みが始まろうという頃に、同僚の大江守之先生にお声がけいただき、「ルネッサンス in 洋光台」のことを知った。「ルネッサンス in 洋光台」は、UR都市機構がすすめるプロジェクトで、洋光台団地の再生をとおして、洋光台地域全体の活性化を目指すものである。そして、このプロジェクトの一環で「CCラボ」がつくられたことを知った。「CC」は、「コミュニティチャレンジ」を指す。洋光台中央団地の広場に面して開かれた、多目的スペースである。年度内は無料で使えるということもあってか、スケジュール表には、セミナーやワークショップなどの情報が並んでいる。地域活動の方法もスタイルも、じつに多彩な可能性があることに、あらためて気づく。

当然のことながら、空間を整備するだけでは、魅力的な「場所」にはならない。人びとのコミュニケーションが必要なのだ。ぼくたちは、日頃から「場のチカラ」をキーワードに据え、人びとが集う「居心地のいい場所」について考えている。とくに「キャンパス」の外での活動のあり方について標榜しているので、大江先生を介した「CCラボ」との出会いは、とても幸運なことだった。

二〇一四年度秋学期は、洋光台団地の界隈でフィールドワークをすすめて、その進捗や成果の報告は、「CCラボ」でおこなうことにした。洋光台で見たり聞いたりしたことは、洋光台に還すことが大切だと考えたからだ。秋から冬にかけて、「ルネッサンス in 洋光台」プロジェクトの協力を得て、五回ほど「CCラボ」でゼミを開講した。また、「団地の暮らし展」として、成果報告の機会を設けることになった。

人びとに近づく

「団地の暮らし」を理解するやり方はたくさんあるが、ぼくたちは、いつもどおりフィールドワークという方法と態度で向き合った。グループインタビューやアンケートでは、人びとの日常生活の機微に触れるのは難しい。フィールドワークの強みは、人びとの個性に密着しながら、ぼくたちの感性をも育てることができる点だ。つまり、現場のようすを知ると同時に、ぼくたちの「見方」を変容させることができる。そして、その過程には、唯一無二の「ものがたり」がある。

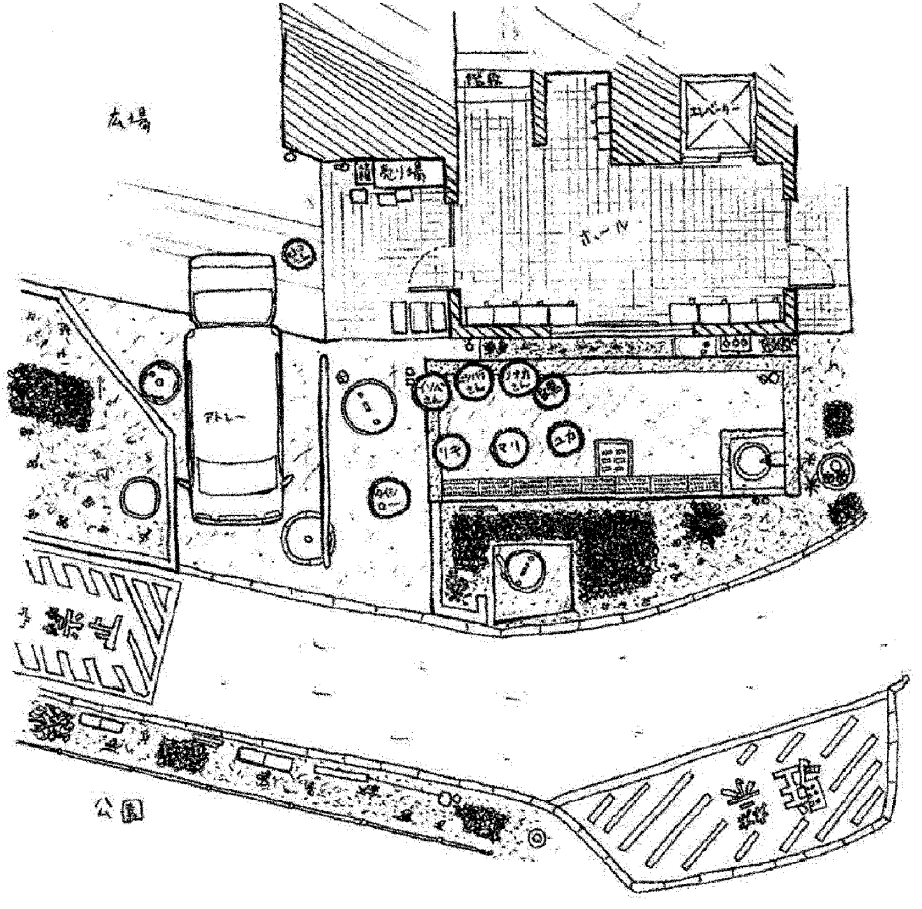
学部の二、三年生は、四つのグループに分かれ、学期をとおして洋光台に通った。大学院生たちも、洋光台団地の界隈を歩き、学部生たちのプレゼンテーションに触発されて、ドキュメンタリーフィルムの制作をはじめた。今回のフィールドワークの最終的な成果のイメージを共有するために「(学期が終わる頃には)団地に暮らす誰かの家にお邪魔して、一緒に鍋をつつく」という「目標」を設定した。できれば、炬燵で鍋を囲んでいる写真もほしい。もちろん、無茶な要求に聞こえるにちがいない。だが、フィールドワークは出会いに満ちている。かかわり方を慎重にさがし、ことばを交わし、少しずつ信頼関係を築いていく。何が起きるか、わからない。数か月先に、「一緒に鍋をつつく」光景があってもおかしくないはずだ。

フィールドワークは、「お邪魔する」調査方法である。準備を怠らず、礼儀や言動にどれだけ注意していても、人びとの暮らしに介入することはまちがいない。程度の差こそあれ、そもそも「お邪魔する」ことなしには成り立たない。フィールドワークにかぎらず、共同生活を送るということ自体、お互いに「お邪魔する」ことのくり返しである。『団地への招待』で描かれていたのは、近隣との関係を育んでゆくための、大切な「見方」だったのだ。

「団地の暮らし」は、洋光台団地で出会った五つの「ものがたり」である。個性を丁寧に描けば描くほど、ぼくたちは、「ものがたり」の「外側」への想像力をかき立てられる。一つひとつの「ものがたり」を味わい、人と語ることによって、洋光台団地のあたらしい理解が創造できるはずだ。言うまでもなく、「ルネッサンス(再生・復活)」が必要なのは「見た目」だけではない。人びとの「見方」を問うことこそが、求められているのだと思う。

井戸端会議

秋庭大志郎・笹野利輝・土屋麻理・枡野友香



北団地3ー19号棟

北団地に陽気な声が響いていた。その声は若い人のものでは無かったが元気に満ち溢れたハリのある笑い声だった。声の出処は北団地高層棟入り口脇のスペース、すぐ横には旧式のダイハツ・アトレーが停められている。その声の主は、僕らからすると「おばあちゃん」世代に当たる女性達だ。何故こんな場所で雑談に耽っているのだろうか。十月も半ばのある日、その六畳ほどのスペースに腰を下ろし、昼下がりの会話を楽しむ四名の女性と一匹のネコに僕らは出会った。

おばあちゃん達が自ら「井戸端会議」と呼ぶこの集まりは、毎週火曜日と金曜日にこの場所で開かれる。実はこの集まりの本来の目的はモトコさんによる野菜の移動販売だ。駅から徒歩十分程の北団地に暮らす人の為に、週に二日モトコさんが市場で野菜を調達し紺色のアトレーでこの場所へやってくる。昔は魚屋やタマゴ屋等、他にも多くの移動販売車が北団地の広場で店を広げていたそうだが、今ではモトコさんだけが規模を縮小して移動販売を続けているという。週に二日やって来る移動販売に集い、買い物もそこそこにご近所さんと井戸端会議を開くその様子は、在りし日の団地の暮らしを映し出す光景のように思えた。

こうした出会いを経てお話を伺っていくうちに、僕たちは毎週金曜日、モトコさんに頂くコーヒーとおやつを両手におばあちゃん達と他愛の無い会話を交わすようになった。おばあちゃんとの関係が一歩深まった、それはそんな瞬間であったように感じる。

四人と一匹の場

僕たちが出会ったのは、野菜売りのモトコさん、快活な所作が特徴のイソベさん、僕たちの会話にいつもくしゃくしゃの笑顔で応えてくれるニシハラさん、おっとりとした雰囲気のノナカさんと、白黒のブチ模様が特徴のネコのシロクロちゃんの四人と一匹だ。

雨の日も、雪の日も、嵐の日でさえも、毎週火曜日と金曜日の十四時過ぎに、モトコさんの到着に合わせてこの場は開かれる。ニシハラさんはシルバーカーを押して毎回一番乗りでこの場に現れる。折りたたみ式の携帯電話を駆使してノナカさんにモトコさんの到着を知らせるのは彼女の役割だ。モトコさんがアトレーからステンレス製の折りたたみ式アウトドアテーブルを取り出し、それを手際良く高層棟の入り口脇に設置

して野菜を並べると即席の野菜売り場は完成する。その脇に使い古しの段ボールを三個積み上げたレジが設けられ、モトコさんによる手書きでその日のお買い上げが勘定される仕組みだ。その日の献立を考えながら繁々と、ものの十分程買い物に勤しむ姿は街の八百屋で見られるものと何ら変わりない光景である。

足腰が悪いニシハラさんのお財布を持って代わりにお勘定をするのはイソベさんの役割だ。その間ニシハラさんは井戸端会議のスペースに腰をかけ僕たちと他愛の無い会話を続ける。ノナカさんは野菜のお買い物そっちのけで今日も仲良しのシロクロちゃんに夢中だ。「ノナカさん！野菜買わないの？」との問いかけに「はいはい」と答えつつも、やっぱりシロクロちゃんに夢中なノナカさんとその姿を見守るおばあちゃん達。そんな何気ないやりとりも愛おしく感じるこの場はおばあちゃん達にとっての大切な場所なのだろう。

「井戸端会議は生き甲斐だもの」

この井戸端会議は解散時間が決まっていない。ある日は日が暮れると、またある日はシロクロちゃんが帰宅すると、それに合わせる様にそれぞれが帰路につく。毎週時間になったら野菜を買いに集まり井戸端会議を開く。日が暮れるまで話し込み、話尽くしたらまた今度。毎回あれだけ話しても次の井戸端会議ではまた日が暮れるまで話し続けてしまう。こうして数年間欠かすこと無く繰り返されるこの井戸端会議は、紛れも無くおばあちゃん達の暮らしにおけるかけがえの無い一幕だ。思えば、「井戸端会議は生き甲斐だもの」と語るニシハラさんの生き生きとした表情は、この場に対する熱意が滲み出たものであるように感じた。

僕たちはおばあちゃん達のこのような姿を見ていて、彼女達にとってこの場に通うということは、活きることそのものなのではないか。と感じるようになった。もしあの井戸端会議が無くなってしまったら、おばあちゃん達は日々淡々と流れる時間をただ過ごすだけの生活をどこか物足りなく感じるに違いない。お互いがお互いの家を訪れることは無いというから、皆で顔を合わせ語らうことにはきっとこの場と野菜の移動販売という動機が必要なのだ。

おそらく、この井戸端会議は、おばあちゃん達にとってのプライベートな時間であり空間なのだろう。誰だって、少し家のことを忘れて雑談に耽りたいことは

あるはずだ。どの奥さんだって、少し旦那さんのことを放っておいてしばらく自分の為の時間を過ごすことだってあるはずだ。野菜売りという名目のもと顔を合わせ、毎回決まって千円程の買い物をした後は待ちに待った時間が始まる。最近の出来事、街の様子、美味しい料理のお話、ある日はひたすら空を眺め、遥か上空を飛んで行く飛行機の色を当てる遊びをしたこともあった。好きなことを好きなだけ話し、好きな場所で好きなだけ好きなように時間を過ごす。北団地高層棟入り口脇のスペースにはおばあちゃん達による、おばあちゃん達の為の時間が確かに息づいている。

戸を越えた、団地の暮らし

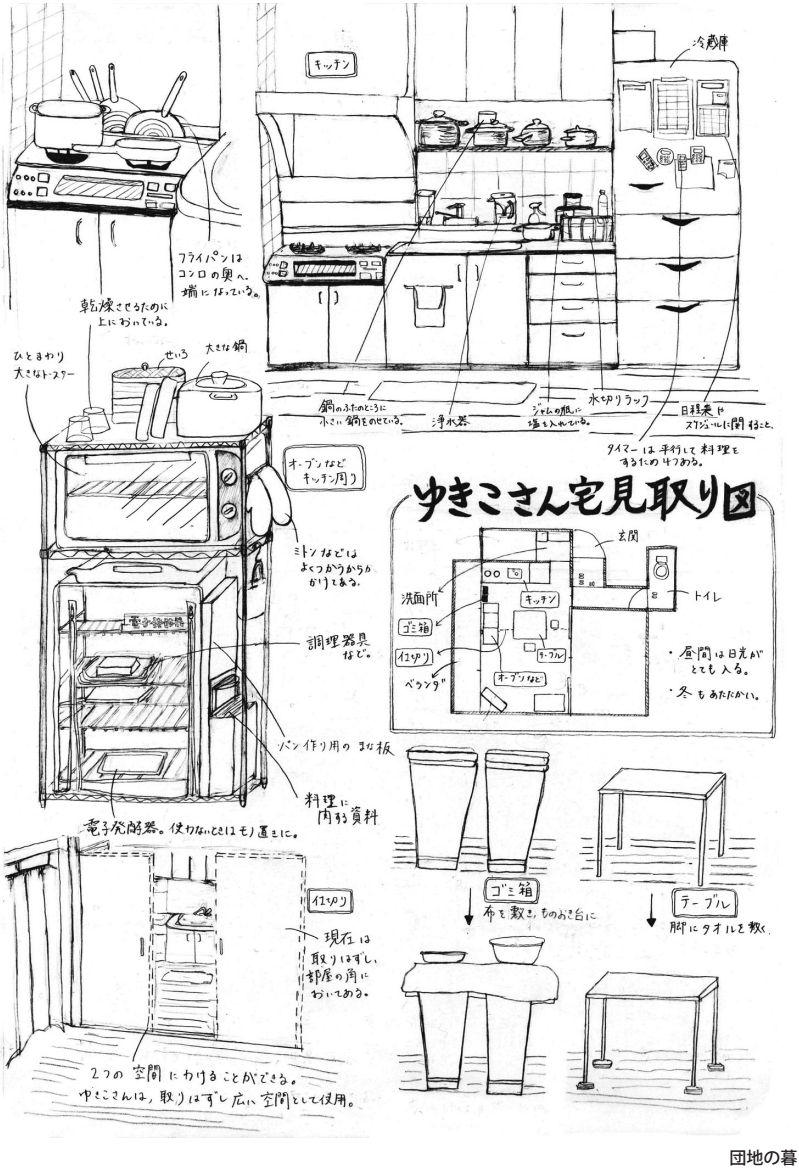
「団地の暮らし」という言葉を聞いて、あなたは一体どのような情景を思い浮かべるだろうか。そのキーワードからついつい「家の中」の光景を想像しがちではないだろうか。しかし、僕たちが遭遇した団地の暮らしは、棟の中に集約された「戸」を飛び越えた人々の交流の姿だった。「団地」という地域社会における人々の暮らしの場は、何も戸の内側に限られたものではない。人々の「暮らし」は、人が集い時間や想いを共にすることで、時に戸を飛び越えどこにだって広がっていくものだということをこの井戸端会議から学ぶことが出来た。

また、「暮らし」という言葉を聞くと、あなたはいささか私的で閉ざされた印象を抱くかもしれない。しかし、この井戸端会議は、おばあちゃん達がそれぞれの暮らしの一端を皆と共にする開かれた時間であり空間であった。他者と時を共にし、その出会いや関わり合いを慈しみ続ける、するといつしか「私」たち個人の暮らしは人と「共」に育むものへと、その在り方を変えていくのかもしれない。

おばあちゃん達の井戸端会議が北団地の一角でいつまでも息づいていくこと、いつまでもおばあちゃん達の笑い声が北団地に響き続けることを僕たちは願って止まない。何かの節目に、はたまた、ふと洋光台に立ち寄った時には、「こんにちは、また来ちゃいました！」「あら、また来たの？いらっしゃい！」と、彼女達の暮らしの一幕へ息を弾ませて帰って行きたい。おばあちゃん達との半年間の交流を経て、この井戸端会議は気づけば僕たちにとっての暮らしの一幕にもなっていたようだった。

食卓を囲むまで

小川健太・小竿まゆる・四十万琢海・原田ふくみ



誰かに近づく

私たちはフィールドワークにおいて常に受け入れられている環境にいた。設計された場所で、私たちは安全性や自由が担保された環境で調査をすることができていたのだ。しかし今回のフィールドに、事前の設計はなかった。昨日まで知らなかった人に自ら声をかけ、関係を築いていく。どのように話しかければいいのか、どんなことばを選べばいいのか。相手の反応をみながら、距離感を模索する慎重さが求められた。拒まれるという経験もしながら、今までの自分たちの環境を見直す機会にもなった。何より、今回のフィールドワークではゼロから関係性を築くことの難しさを知った。

ゆきこさんに近づく

このような厳しい状況のなかでも、私たちに耳を傾けてくれた「ゆきこさん」という団地に住む女性と出会った。話しかけたその日から連絡先を交換し、フェイスブックの友達申請を行うなど、初対面とは思えないほど協力的な印象を受けた。単純にそれが嬉しくて、わたしたちはゆきこさんに近づこうと決めたのだった。

ゆきこさんは洋光台北団地で七年間、ご主人と二人暮らしをしている女性で、昨年秋から小さな料理教室を開いている方である。大学から料理と向き合っているゆきこさんは、仕事柄、日常的に自宅でパンを作り、さまざまな料理をする。自分のものにした料理を、その教室で教えているのだ。

彼女と連絡先を交換して間もなく、私たちはメールを通して連絡をとりはじめた。彼女は料理教室という開かれた場を持っていたのでメンバー全員を認識してもらうために、私たちはこの場に参加してみることを決めた。料理教室は六人を定員としていて、他の参加者は子供がいる主婦の方や旦那さんと二人暮らしの主婦の方などだ。あの料理教室は、誰かのために料理を学ぼうとする人たちが作り上げた暖かい場所だった。料理教室が終わった後にゆきこさんと話す時間を頂き、私たちは自分のたちのことを説明した。そのあと、嬉しいことにゆきこさんから「今度うちにいらしてください。」というお誘いをいただくことができた。しかし、口頭で自分たちのことを説明することは予想以上に難しく、ゆきこさんも腑に落ちたとは言えない様子だったので、お宅へお伺いする前に、私たちは何者

で、何をしているのかということを知っていただくほうが良いと考えた。その方法として活動内容を口頭で説明するよりも、実際に研究会の活動を見てもらった方が良いのではないかと思い、CCラボにゆきこさんをお呼びして私たちのプレゼンテーションを見てもらいたいと考えた。それとともに、加藤文俊研究会としての活動を肌で感じてもらおうと試みた。快く了承してくださり、時間をつくってプレゼンテーション見に来てくださった。夕飯の支度があると言っていたにも関わらず全ての班の発表を見届けて、発表後には「先日の発表をきっかけに、私自身が団地に関心を持つようになりました。」とメールをくださった。ゆきこさんはいつも私たちの活動を理解しようとしてくれる。そのように親切な方であったので、私たちは円滑に活動を進めることができたのだ。

ゆきこさんの工夫

街中がクリスマスの雰囲気で賑わう頃に、私たちはゆきこさんのお宅にお伺いした。団地は、狭く近隣住民とも密接した生活形態であるため、与えられたスペースを最大限に活用し、近隣住民の迷惑にならないような工夫を施す必要がある。ゆきこさんの生活空間には以下の工夫が見られた。

①間取り

・リビングとキッチンを仕切る襖を取り払って二つの部屋を一つにしている。これによってキッチンで料理を作っている最中でも、リビングルームにいる人と会話を交わすことができる。

②キッチン

・コンロの奥の狭い場所にフライパンを縦にして収納しており、スペースを有効に活用している。

・収納棚には食器や調味料が整頓されている。さらにその収納棚の中に更に小さな棚を備え付けており、それらの棚を使い分けながら調味料などの小物をうまく整理している。

③キッチンの周辺

・ゆきこさんは日常的にパンをよく作るので自家用発酵器があり、棚に収納されている。

・自家用発酵器を使わないときには、その中のスペースを収納棚として活用している。

・オーブンも棚に置かれ、その棚の下には料理本などが収納されている。

・オーブンが置かれている棚の上の段には、料理教室で使った容器などが置かれている。これはオーブンから出た熱で容器を乾かし、カビから守る工夫である。

④パンづくり

・パンを捏ねるときにはテーブルをキッチンの近くに動かし、広い場所で捏ねている。テーブルを動かす時、音が響いて下の階の住民に迷惑にならないように、テーブルの足の下には雑巾を挟んでいる。

・以前、パンの生地を叩くときは振動や騒音の迷惑にならないようにお風呂場で叩いていたが、それでも迷惑になると考え、いまは叩くという行程があまりないパンを作るようにしている。

こうした工夫から、ゆきこさんは限られたスペースを有効に、綺麗に活用していることがわかる。また、常に周囲への配慮も欠かさない方だということも読み取ることができるだろう。迷惑をかけないような工夫をひとつひとつ考えたり、足音にまで気を配ったりして、ごく当たり前のように実践している方なのだ。

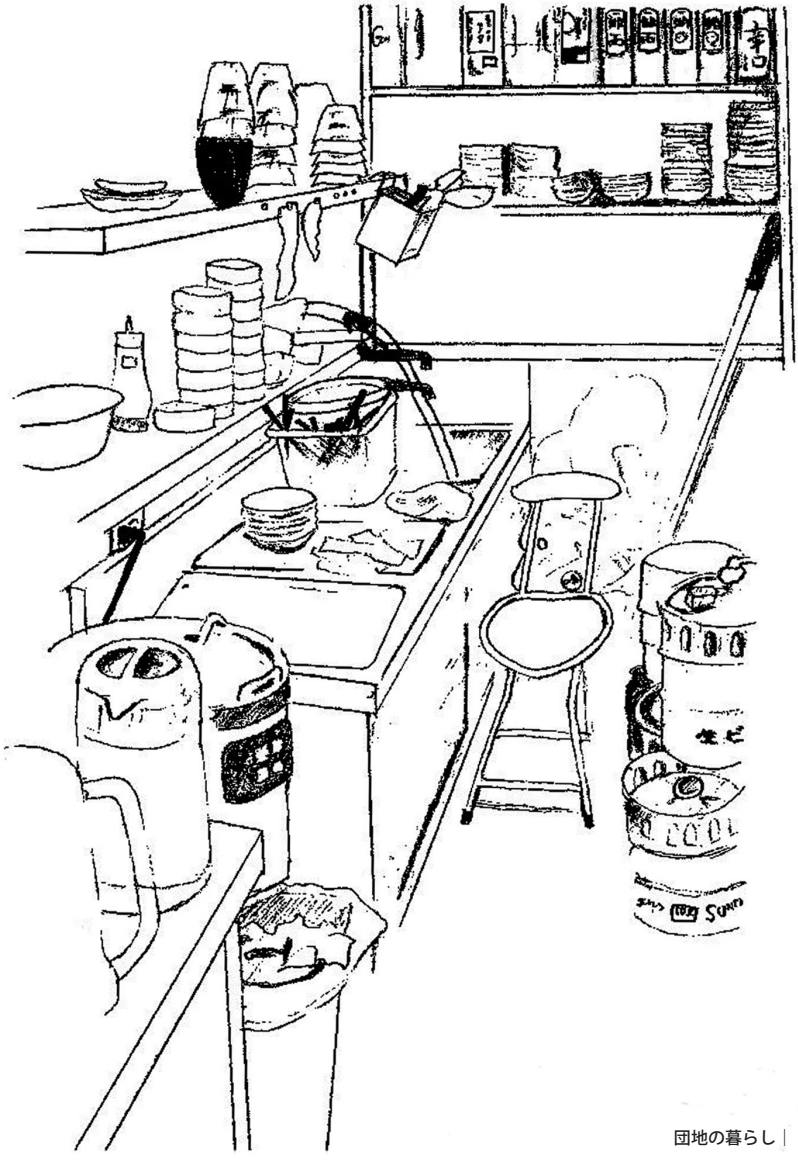
ゆきこさんと私たち

私たちはおそらく、とても不器用だった。普段、人と仲良くなることはさほど難しくないことのはずなのに、あたりまえにやっていることのはずなのに、私たちはとても敏感に、そして繊細になっていた。もしかしたら、「調査」ということばに囚われていたのは、私たちだったのかもしれない。ただその難しさに頭を悩ませながらも、ゆきこさんにもっと近づきたい、仲良くなりたいという想いが弱くなることは一度もなかった。知れば知るほどゆきこさんというひとに惹かれていった。ゼロから関係性を築くという挑戦は、私たちに多くの学びを与えてくれた。

先日、ゆきこさんから「洋光台の研究が終わっても、何かの形で繋がっていけたらうれしいです。出会えてうれしかったです。」というメールをいただいた。このことばを見たとき、私たちは葛藤がありながら着実にゆきこさんと関係性をふかめることができていたのだと安心した。それとともに、コミュニケーションの複雑さに頭を抱えながらもゆきこさんに近づくことができたのは、彼女の優しさのおかげなのではないか。ゆきこさんは、終始私たちのことを気遣い、求めていることば以上のことばをくれるひとだ。だからこそ、また会いたくなるのだ。

中華王

中島彩也香・堀越千晴・山崎雄大



彼と出会う

夕飯を済ませるために立ち寄ったのがここ、中華料理店の中華王だった。洋光台駅の改札を出てロータリーを右伝いに進み、横断歩道を渡った先の建物の二階にある。餃子を片手に親指をぐっと立てるコック帽のキャラクターが目印だ。明るい店内に入ると、若者向けの洋楽が控えめに流れている。左側は真っ赤なテーブルにポップなピンク色の椅子が配置された一人用のカウンター席。右側はグループ用で、テーブル席が二つと円卓が一つ。さらに店を奥に進むと、二四名は座れるくらいの座敷の席が用意されている。食材を調理する音を響かせ、時折大きな炎を上げるキッチンのコックさんの姿は、奥の座敷側からしか見えない。店内の壁には手作り感あふれる料理写真が何枚も貼られていて、「毎週木曜日を休みをさせて頂きます」などと少し拙い日本語も店の所々で見られる。

カウンターと座敷の間にある少し奥まった空間で、大きな炊飯器に片腕を乗っけて立っているのは、快活で人あたりの良い中国人男性。彼こそが、中華王の店主である王さんだ。彼の定位置であるこの場所は一見乱雑だが、ドリンクを作ったりコックさんから料理を受け取ったりと、店の中心になっている。王さんはこの位置に立ちながら、貼り出しメニューや手書きの案内について「僕が書いたんですよ」と少し癖のある日本語で恥ずかしそうに、愛想良く教えてくれた。

深く関わる

王さんは自らたくさんのことを話してくれた。洋光台に来た経緯、接客のポリシー、家族の話など。しかし、それだけでは彼の暮らしを知ったとは言えない。

誰かの暮らしを知るということは、その人の私的な領域に踏み込むようなものだ。いくら調査という名目で成り立つ関係でも、調査する側とされる側の信頼関係がなければ、暮らしという深い部分を見ることはできない。私たちが求める「王さんの暮らし」を垣間見るには、「店員と客」の関係では不十分なのだ。

関係を深めるために、私たちは王さんに自分たちのことを知ってもらおうと試みた。加藤研で行ったフィールドワークの冊子や成果物を渡したり、個人的な恋愛相談をしたり。大きな転機となったのは、スマホアプリのＬＩＮＥでやり取りをするようになったことかもしれない。連絡先を交換し、文字だけではなく

スタンプや画像を送り合うなどインフォーマルなやり取りが増えたことで、よりフランクなコミュニケーションができるようになった。

そうこうしているうちに、自然と関係性は変わっていったように思う。私たちから王さんへと一方向的な矢印が向いていた状態から、少しずつ王さんから私たちへの矢印も見え始めるようになった。双方向に向いた矢印は、互いが互いを知ろうとする良い関係を築くことができ、次第にフィールドワークの楽しさも増していった。

一日を追う

十二月上旬の土曜日、朝九時五十分。王さんは店に現れた。朝から晩まで営業する店を切り盛りする彼の暮らしの中心は、家ではなく店だ。とはいえ中央団地の自宅からこの店までは歩いて一分程。彼の生活は小さな範囲に収まっている。

紺色のダウンジャケットを脱ぐと、中も同じく紺色のトレーナー。下は黒のスウェットで、靴は黒のクロックスと、いつも店で着ている服そのままだった。唯一いつもと違うのは、頭の後ろに寝癖が付いていたことぐらいだ。今日は寝坊をしたらしい。毎朝奥さんが作ってくれるという粟のおかゆを食べる時間もなかったのかもしれない。王さんは、煙草を吸っていいか私たちに確認して、メビウスの箱から一本取り出し口に咥えた。

昨夜の洗い物の残りをする。床をモップで擦り、テーブルを拭く。昨日炊いたお米の残りは今日の炒飯に使うために、大きな炊飯器から取り出し今日の分のお米を炊く。慣れた動きで立ち上げの仕事を済ませると、買い物をしに外へ出た。ふと立ち寄ったのはスーパーの横に位置する団地内の公園で、一歳にも満たない彼の娘と義母が一緒に遊んでいた。王さんはいつになく優しげな、リラックスした表情でその姿を見つめる。仕事で会えない時間は多いが、家族の暮らしがいつも自分と近い距離に存在することは、安心できる材料なのかもしれない。店に戻ると、コックさんが用意してくれた少し遅めの朝ご飯、レタス炒飯を食べた。

時刻は十一時をまわり、ランチの営業が始まる。少しずつ入ってくる客は家族連れと一人の客が多く、中でも座敷に座った子連れの常連夫婦とは、二歳くらいの男の子を介して会話が弾んでいた。他にも中国人と

思わしき若い男性三人組が中国語で楽しそうに王さんと会話をしていたり、近くのスーパーや携帯ショップの店員らしき女性が一人で麻婆豆腐を食べていたりと、客層もさまざまだ。王さんは店中を忙しく歩いて回る。

十五時にランチ営業が終わると、十七時まで休憩。店を一度閉め、遅めのお昼ご飯としてチンジャオロース風の野菜炒めなど計三品とコーヒーを素早く平らげた。すると、ずっとキッチンにいて姿が見えなかったコックさんが現れた。日本語が話せないらしく、王さんと中国語でひとしきり話したあと、二人は座敷で昼寝をした。仕事柄、寝ないと体がもたないのだ。

ディナー営業が始まると、外が寒いから夜はあまり人が来ないよ、と王さんが零す。なるほど、見ていると男性の一人客がほとんどで、明らかに昼よりも来客数は少ないように見えた。「久しぶりですね」と王さんが声をかけた紺色のスーツの常連男性も、少し王さんとの会話を楽しんだあと、早々に店を去った。

やがて二二時が近づき店から客がいなくなると、コックさんはキッチンの片付けを済ませて港南台の自宅へと帰って行った。王さんは洗い物も片付けも翌日に回して、少し疲れた顔で店のシャッターを閉めた。

仕事のあと

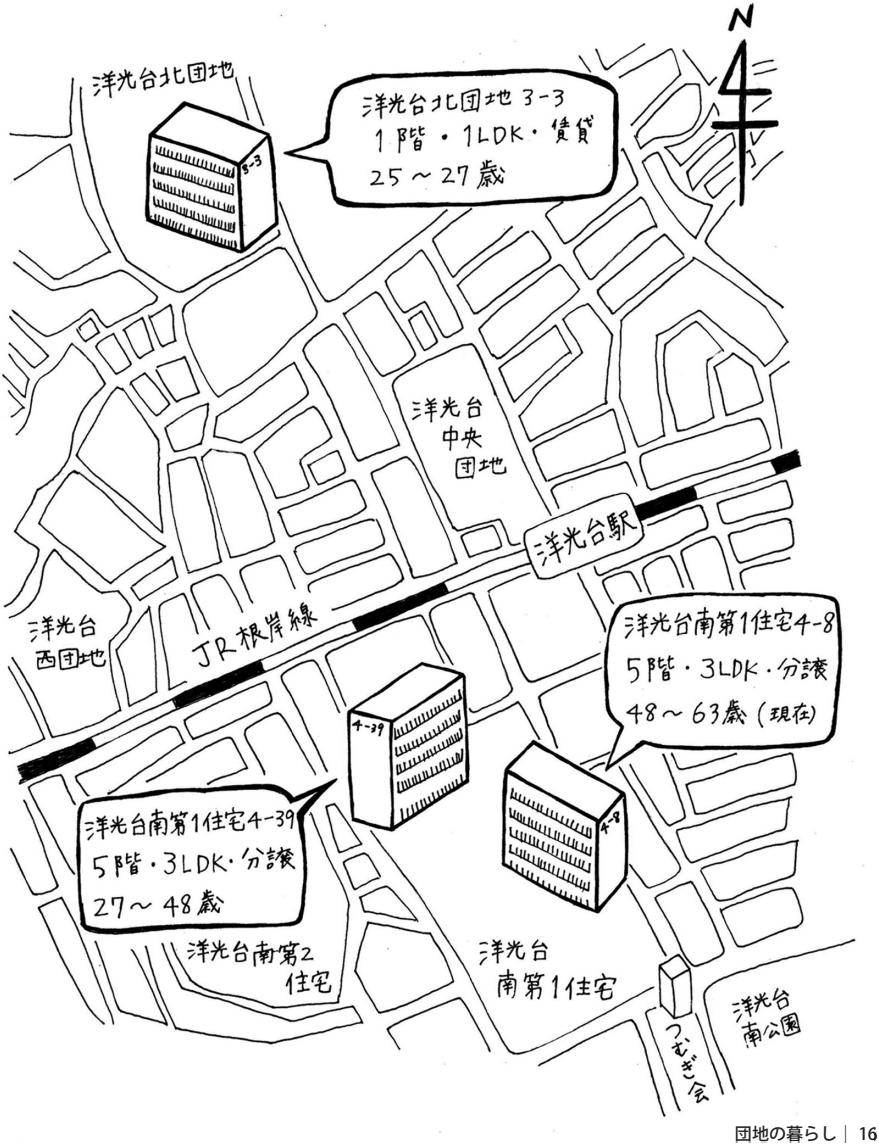
仕事が早く終わると居酒屋に一杯飲みに行くこともあるが、今日はそんな気分ではない。そんな日は決まって、近くの自動販売機でジュースを買って、自宅前の公園のベンチで三十分から一時間くらいを過ごす。

青白く光る街灯が数個並んでいるその公園は、一部工事中だ。新しい遊具でも立つのだろうか。その工事区域に向かう形で設置されたベンチに腰掛け、もっと日本人の友達が欲しい、近隣のお店とのつながりをもっと増やしたい…など、普段店ではなかなか聞けない話をたくさんした。「店では、ずっと笑ってなきゃいけないから疲れる」とふいに本音を漏らす王さんは、見慣れた照れ笑いなのにどこか違って見える。普段よりも小さな声で語る王さんと、それを聞く私たちは、まるで修学旅行の夜に先生に見つからないように夜更かしをしている小学生のようだ。

いつの間にか時計は二三時半を過ぎ、煙草の箱は空になっていた。たまに家から顔を出して早く帰るように言う奥さんは、今日はもう眠ってしまったようだ。

南の三間

此下千晴・齊藤崇・檜山永梨香



ケンさんとの出会い

よく晴れた日だった。私たちは、並木が色づく十一月の洋光台を歩いていた。先日、CCラボで知り合った方のご厚意で、洋光台団地に住む男性を紹介していただくことになっていたのだ。駅を出て南にまっすぐ、立ち並ぶ団地を横目に、交差点の角に建つビルに向かった。その二階、「つむぎ会」の事務所で、私たちはケンさんと出会った。

「僕はあんまり参考にならないと思うんだけどなぁ」。私たちがフィールドワークの目的を説明すると、ケンさんは少し頬を赤らめながら、穏やかな口調でそう言った。洋光台団地に住んで三十八年になる彼は、社労士の仕事をする傍ら、ここのNPOの代表を務めている。聞けば、団地のなかで二度も引っ越しをしているそうだ。優しく質問に答えてくださるその人柄に惹かれた私たちは、もっと彼に近づきたいと思った。彼を通して、団地の暮らしを知ることにした。

フィールドワークと「場」

ケンさんは、私たちを受け入れてくださった。だが、その後のフィールドワークは、必ずしも順調に進んでいったわけではなかった。ケンさんと私たちの予定がなかなか合わず、会えない日々が続いたのだ。

フィールドワークをするうえで、現場へのアクセスのしやすさは重要だ。他のグループがアプローチをした方々は、野菜の移動販売や料理教室、そして中華料理店という「場」を持っていた。それらの「場」は、学生でも比較的容易にアクセスすることができるものであり、だからこそ、何度も通うことで時間をかけて相手との関係を深めることができたのだろう。一方で、ケンさんと私たちの間には、私たちがアクセスできる「場」がなかった。私たちがケンさんに会うためには、新しく「場」をつくらなくてはならなかったのだ。

そんなこともあり、私たちがきちんとケンさんのお話を聞くことができたのは、年が明けて少し経ってからのことだった。彼の人生を振り返りながら、その時々の出来事や団地について訪ねた。ケンさんは、昔を思い出しながら一言一言丁寧に語ってくださった。

紡がれてきた暮らし

ケンさんが洋光台に越してきたのは、二十五歳の時のことだった。就職を機に山口県から横浜に出てきて、

民間のアパートで暮らしていた彼。いくつかの団地の抽選に申し込んでいたなかで、一番はじめに当選したのが洋光台団地だった。とくに団地に対する憧れがあったわけではない。だが、立地や環境がよく、綺麗で整然とした団地を、彼は気に入ったのだった。

そうして洋光台北団地の１ＬＤＫで一人暮らしをはじめたケンさんは、一年も経たずに結婚をする。その翌年には長女が生まれ、あっという間に家族は三人に増えた。そんな時、遊びに来ていた奥さんのご両親が言った「ちょっと狭いわね」という言葉が、ケンさんに引っ越しを意識させることになる。子どもが増えた時のことを考えて部屋数の多いところにしよう。不動産屋に相談すると、南団地に空き部屋が見つかった。南の方角に日当たりのいい部屋が三つ並んだ３ＬＤＫ。広々としたベランダは一続きになっていて、洗濯物を干すことも植物を育てることもできる。その頃の団地は人気の物件で、売り手市場だったため、購入の際はとても気を遣ったという。

その後、次女と長男が生まれ、家族は五人になった。ケンさんは電機メーカーでの勤務を辞め、昔からやりたかった福祉の仕事を始めた。勉強好きのケンさんは、仕事をしながら社労士の資格を取得したのだった。子どもたちが大きくなると学童のパパ友も増え、一人暮らしの時は参加できずにいた地域のイベントにも顔を出すようになった。

３ＬＤＫのは部屋は、五人で暮らすには十分な広さだった。しかし、ある事件をきっかけに、ケンさんは再び引っ越しをすることになる。「下の子が中学生だったから、ちょうど十五年前かな」と、彼は懐かしそうに振り返る。子どもが洗濯をしようとして、水漏れを起こしてしまった。当時、団地には洗濯機のための排水口がなく、洗濯排水はホースをお風呂場まで伸ばして捨てていた。そのホースが外れてしまい、こぼれた水が下の階まで漏ってしまったのだった。下の住人には「気にしないで」と言われたが、顔見知りだったこともあり、かえって居づらくなってしまったのだと言う。引っ越してから二十年。ちょうど部屋が傷んできてリフォームを考え始めていた時期でもあったため、新しい住まいを探すことを決めたのだった。

ケンさんが引っ越し先に選んだのは、同じ南団地の同じく五階にある部屋だった。少し広くなったこと以外に大きな変化はない。生活スタイルも変わらないし、

子どもたちは転校する必要もない。団地内で引っ越した理由を「面倒くさいからかなぁ」と語る彼だったが、その言葉は団地での暮らしに満足しているということの表れでもあった。ケンさんが社労士として独立したのもこの頃だった。

三人の子どもたちは、数年前に巣立っていった。結婚をしたり、子どもが生まれたり、海外に渡ったり、それぞれがそれぞれの場所で新しい暮らしを始めた。五人で住んでいた部屋には、今、ケンさんと奥さんが二人で暮らしている。

洋光台団地に暮らして三十八年。去年、膝を悪くした。ケンさんの住む四街区にはエレベーターがない。六十三歳にもなると、五階の自宅までの階段の昇り降りが億劫に感じられることもある。この先のことを考えて、民間のマンションに引っ越したらどうか。子どもたちに心配され、不動産屋を巡ったこともあった。だが、それはもうやめた。「一度団地に住んじゃうとね」と、彼は少し困ったような、けれども照れくさそうな顔で言った。「南に三間ってなかなかないの」。

さまざまな出来事が起こり、変化してきたケンさんの暮らしのなかで、団地に住んでいるということは変わらなかった。

洋光台団地

洋光台団地の入居がはじまってから、もうすぐ四十五年が経とうとしている。かつては時代の最先端だったという団地の建物も、今の私たちの目にはだいぶ古く感じられる。しかし、暮らしの現場としての団地が時代遅れになってしまったわけではない。そこでは、今日も多くの人びとが生活を営んでいるのである。

ケンさんは、洋光台団地をまっすぐに褒めることはなかった。だが、時折はにかみながら生き生きと団地について語る彼の言葉は、自らの暮らしを大切にし、洋光台という場所を誇らしく思う気持ちで溢れていた。彼が引っ越しをしても洋光台団地に住み続けているのは、彼にとってそこが居心地の良い場所であるからに違いない。ケンさんには、洋光台団地でなくてはならない理由があったのだ。

「南の三間」には、今日も暖かな日差しが差し込んでいる。日当たりのいい住まいを提供しようとした昔の設計者の想いは、今も脈々と生き続け、洋光台団地を形づくっている。

註

◎「ルネッサンス in 洋光台」の「アドバイザー会議」や「エリア会議」、ワークショップなどの成果は、『団地のゆるさが都市（まち）を変える。』（新建築・別冊、二〇一四）にまとめられている。

◎今回の洋光台団地におけるフィールドワークの成果は、二〇一五年一月二四日（土）～二六日（月）「団地の暮らし展」（洋光台中央団地・CCラボ）、および二〇一五年二月六日（金）～九日（月）「フィールドワーク展XI　両想い」（BankART Studio NYK・2Bギャラリー）で展示される予定。

・団地の暮らし　http://vanotica.net/danchi/

・フィールドワーク展XI　http://vanotica.net/fw1011/

団地の暮らし - Danchi Days
http://vanotica.net/danchi/

2015 年 1 月 24 日発行
編集・発行　慶應義塾大学 環境情報学部加藤文俊研究室　http://fklab.net/
〒 252-0882　神奈川県藤沢市遠藤 5322　デザイン棟B（ドコモハウス）
Phone 0466-49-3619　　Fax 0466-47-5041